

令和6年2月29日

【巻頭言】

(理事長 野々村好三)

皆さん、こんにちは。2024年初めてのニュースをお届けします。

この度、能登半島地震で災害に遭われた方々に、心よりお見舞いを申し上げます。一日も早く平穏な毎日が訪れるよう祈るばかりです。

さて教点連では、6月の第1週に総会とセミナーの対面開催を予定しております。詳細につきましては4月以降にお知らせいたします。多くの皆様と対面でお会いできますことを楽しみにしております。

皆様におかれましては年度末でお忙しい時期かと思えます。どうか体調にお気をつけてお過ごしください。

【目次】

12月の点字楽譜セミナーの資料を提供します

「点字学習指導の手引（令和5年改訂版）」が発行されました

令和5年度第2回（通算37回）セミナーのご報告

「Getting in Touch with Literacy 2023」に参加して

理事会報告

【12月の点字楽譜セミナーの資料を提供します】

昨年12月9日に、教点連セミナー「点字教科書における点字楽譜の扱いとレイアウト」を開催いたしました（4ページに「報告」）。これは、昨年10月に文部科学省編「点字学習指導の手引（令和5年改訂版）」に明記され音楽点字教科書に反映されることになったのを受けて開催したものです。つきましては、セミナーで使用いたしました資料の墨字・点字のデータを提供いたします。また、音楽教科書の点訳時に掲載する必要のある、小学校の学年進行に合わせた「点字楽譜の説明例」（BESデータ）の案も作成いたしました。ご入り用の団体・個人の方は次へメールでお申し込みください。

申し込みメールタイトル：「教点連点字楽譜セミナー資料依頼」

記入内容：（団体名）、氏名、メールアドレス（資料は添付して送ります）

締め切り：3月末日

申し込み先：pxb02164@nifty.com（加藤俊和宛）

【「点字学習指導の手引（令和5年改訂版）」が発行されました】

20年ぶりに「点字学習指導の手引」（文部科学省発行）が改訂されました。点字学習の導入方法や、点字盤・タイプライターの使い方の指導をはじめ、各教科の指導方法、触図の事例などが豊富に掲載されており、たいへん興味深い指導書です。

現在、点字版も製作中です。完成次第「サピエ図書館」にデータを登録しますので、しばらくお待ちください。

「点字学習指導の手引（令和5年改訂版）」

出版社 ジアース教育新社

ISBN 978-4-86371-671-1

B5判／400頁

2023年10月25日発売

定価 2,420円（本体 2,200円＋税 10%）

手引目次内容

目次

まえがき

第1編

第1章 「点字学習指導」の位置付け

第1節 点字学習指導の意義

第2節 教育課程と点字学習指導

第2章 点字の読み書きの学習

第1節 点字学習のレディネスと動機付け

第2節 点字の読み書き学習の概要

第3節 点字学習指導の計画と評価

第3章 点字学習の基礎

第1節 初期的な手の運動の学習

第2節 触覚による弁別学習

第3節 図形の弁別、分解・構成の学習

第4節 点の位置付けと6点の弁別

第5節 点字学習の基礎としての話し言葉の学習

第6節 象徴機能の学習と点字学習への動機付け

第4章 触読の学習の実際

第1節 両手読みの動作の習得

第2節 点字の枠組み（行・マス）の意識化

第3節 単位となる一マス6点の弁別

第4節 点字の形と字音の結び付け

第5節 マスあけ（分かち書き・切れ続き）の基礎的な理解

第5章 書きの学習の実際

第1節 点字タイプライターによる書きの学習

第2節 点字盤・携帯用点字器による書きの学習

第3節 字音と点字を結び付けて、語を書き表す学習

第4節 分かち書きと切れ続きの学習

第5節 文の構成と表記符号の学習

第6章 点字表記法の体系的学習

第1節 語の書き表し方の学習

第2節 分かち書きの学習

第3節 表記符号の用法などの学習

第4節 文の種類による書き方の学習

第5節 その他の書き方

第6節 試験問題と解答の書き方

第7章 図形触読の学習

第1節 触図の基本事項

第2節 教材としての触図製作と触図の読み方

第3節 各種グラフの表し方と読み方

第4節 表の表し方と読み方

第8章 教科学習における指導上の配慮

第1節 国語科における配慮事項

第2節 社会科における配慮事項

第3節 算数・数学科における配慮事項

第4節 理科における配慮事項

第5節 英語科における配慮事項

第6節 点字楽譜指導における配慮事項

第7節 情報処理用点字の指導

第9章 中途視覚障害者への点字学習指導

第1節 中途視覚障害者への点字学習指導の工夫と配慮

第2節 中途視覚障害者への点字学習指導の方法

第10章 点字使用者の漢字仮名交じり文体系の学習

第1節 漢字や仮名文字について学習する意義

第2節 墨字と点字それぞれの表記の特徴

第3節 墨字についての学習内容と方法

第4節 墨字文書作成のための学習

第11章 点字使用環境の電子化に関連する指導

第1節 電子化の概要

第2節 点字データの読み書きに関する指導

第3節 点字を介しての墨字の閲覧に関する指導

第2編 資料

用語解説

【令和5年度 第2回（通算37回）セミナーのご報告】

様々な生徒に分かりやすい点字楽譜の表現

～音楽の点字教科書に必要な基本とは～

日時：2023年12月9日（土）13：30～15：30

Zoom オンライン（ライブ）

講師：加藤 俊和 氏

（盲学校用 点字音楽教科書編集者・点字楽譜利用連絡会副代表）

参加者：70名

日本点字委員会委員そして1992年国際点字楽譜会議日本代表の加藤氏に、点字教科書における点字楽譜の扱いとレイアウトというテーマで幅広く講演いただきました。

1. 点字楽譜の世界と日本の動向

（1）戦後の日本の音楽教育と点字楽譜

1929（昭和4）年、欧米の関係者により点字楽譜統一会議が開催される。

1954（昭和29）年、世界点字楽譜統一会議が開催され、日本から鳥居篤治郎氏・岩橋英行氏が参加。日本で『世界点字楽譜解説』発行、その後の日本の点字楽譜の基本となり、音楽点字教科書に反映され現在に至る。

1984（昭和59）年、文部省編『点字楽譜の手引』発行（以下、『手引』）。

（2）今後の日本の点字教科書の点字楽譜表記

令和5年10月、文科省編『点字学習指導の手引改訂版』発行。

① 和音の「音符法」の継続使用

② 楽譜中にアルファベットだけでなく日本語表現も含む表記による対応

2. 従来の日本の点字楽譜記号からの変更

（1）音部記号の扱い

点字教科書における点字の音部記号

ト音記号 $\text{⠠} \text{⠠} \text{⠠}$

ヘ音記号 $\text{⠠} \text{⠠} \text{⠠}$

ハ音記号 $\text{⠠} \text{⠠} \text{⠠}$

（2）ダル・セーニョ

D.S. $\text{⠠} \text{⠠} \text{⠠} \text{⠠} \text{⠠} \text{⠠}$

（3）音程記号の「同度記号の廃止」について

1度（同度） $\text{⠠} \text{⠠}$ の記号は廃止、8度の音程記号 $\text{⠠} \text{⠠}$ にオクターブ記号を付ける。

（4）用語の名称

* オクターブの記号（音列記号）

幹音の音符に前置してオクターブの違いを表す「音列記号」は、「オクターブ記号（音列記号）」とする。

* 「集合音符」と「部分け内分け」

これらの用語はなるべく使用せず、「集合音符」は「16分音符以下のグループの表示」、「部分け内分け」は「和音のパート分けの記号と表示」などと説明する。

3. 日本独自の用法

(1) 和音の音符法の扱いと音程法

点字教科書では児童生徒が直接学習するための楽譜は「音符法」、そうではないピアノ伴奏譜等については「音程法」で表記したりする。

(2) 文字符「 $\dot{\cdot}$ 」の制限と「 $\ddot{\cdot}$ ~ $\ddot{\cdot}$ 」の使用

楽譜中で $\dot{\cdot}$ は、記号・略語の範囲内にとどめ、日本語表現を含む発想などの用語については $\ddot{\cdot}$ $\ddot{\cdot}$ で挟む。

(3) 点字教科書におけるコードの表示

* 日本におけるアルファベット表現によるコード表示

① コードの前置符は $\dot{\cdot}$ $\dot{\cdot}$ とする。

② コードを示すアルファベット大文字には、それぞれ外文字 $\dot{\cdot}$ を付すことで「コードを明示」し、大文字は省略する。

③ コードを示すアルファベットに付随して表示されるアルファベットは外文字なしで続ける。数字には数符を付ける。+ - / は日本の数学記号 $\dot{\cdot}$ $\dot{\cdot}$ $\dot{\cdot}$ とする。メジャーを示す M などや根音を示すアルファベット大文字は、大文字のみ付す。

④ 1小節内は続けて書き、小節と小節の間は一マスあける。

⑤ 1小節内の連続するコードのリズムは均等割とする。

⑥ 1小節内のリズムが均等ではないコードは、「コードが前に同じ」の記号は、 $\dot{\cdot}$ $\dot{\cdot}$ $\dot{\cdot}$ $\dot{\cdot}$ $\dot{\cdot}$ などによって表し、リズムを表現する。（さらに複雑なリズムは「注」でリズムを表現する。）

(4) 日本語の歌曲の「 $\dot{\cdot}$ 」などの記号

歌曲の歌詞と音符の対応、歌曲のスラーなど（『手引』p.63）

(5) (→) (←) 主旋律の範囲を示す記号

主旋律始まり $\dot{\cdot}$ $\dot{\cdot}$ $\dot{\cdot}$ $\dot{\cdot}$ $\dot{\cdot}$ 主旋律終わり $\dot{\cdot}$ $\dot{\cdot}$ $\dot{\cdot}$ $\dot{\cdot}$ $\dot{\cdot}$

(6) 小節番号による繰り返し

日本語の数字表現を用いる。 $\dot{\cdot}$ $\dot{\cdot}$ $\dot{\cdot}$ $\dot{\cdot}$ $\dot{\cdot}$ $\dot{\cdot}$ （『手引』p.50）

(7) 日本の注記のレイアウト

曲頭の注、曲中のページ区切り全マス棒線下の注、曲後の注。原本ページ数の教科書表示

4. 点字楽譜の用法の諸注意

(1) オクターブ記号と行移し

行移し（前の行からの続き）の音符にはオクターブの記号は不要。

(2) 複縦線

大きい区切り目などに限定して用いる。

(3) 臨時記号

「臨時記号の有効範囲は 1 小節内」が原則、必要な場合は注記する。

(4) 記号・略語と「半マスあけ」

点字楽譜においては、「 ♩ で始まる略語」の後のピリオドは ? で表示する。

「記号」であれば ♩ で始まっても、後に 。 は不要。

5. 点字音楽教科書のページレイアウト

(1) 教科書等のレイアウト

点字教科書の、特に低学年用の場合、生徒用ではない楽譜などが多く含まれているので、生徒が用いる部分をしっかりと選んで点訳する。

「生徒用でない部分」については、巻末にまとめるか、少なくともその曲の最後に入れるなど、配慮が必要。盲学校用点字教科書では、伴奏譜は巻末にまとめ、中学教科書では音符法で、高校教科書では音程法で記している。

(2) 歌の楽譜のレイアウト（歌詞行と楽譜行）

① まず、歌詞を書く。

② 次に、「主旋律」の歌詞とその音符のみを取り出して書く。

③ 最後に、いろいろと付けた楽譜を書く。合唱の場合は、そのあとに、他のパートを書く。日本語と原語が混在している楽譜は、日本語の曲としてと、原語の曲として、と大きく分けて点訳する。

④ 繰り返し記号が使われ、繰り返したあとのリズムが異なり小さく書いてある部分が多いような楽譜では、点字楽譜では繰り返し記号を使わず、歌う順序どおりに書く。

(3) コードの扱いとレイアウト

コードも一つのパートとして取り出して書く。

(4) 各種楽譜のレイアウト

器楽曲においては、生徒が演奏する楽器ごとに分けて点訳する。

「総譜の形式」が必要な場合は、楽器別の楽譜の後に加える。

盲学校用点字教科書のリコーダー「閉じ、開け、半開け」は「 :: :: :: 」

以上が講演内容となります。

最後に記号等について質疑応答があり、点字楽譜の終わったところは必ず :: にする等説明がありました。

また、点字教科書に用例も含めた点字楽譜の解説を載せることは重要なので、準備を進めているとのことでした。

具体的にわかりやすく教えていただき、加藤さん、ありがとうございました。

【「Getting in Touch with Literacy 2023」に参加して】

(奥野 真里)

2023年11月29日～12月2日、米国フロリダ州で行われたカンファレンス「Getting in Touch with Literacy 2023」において、「全国視覚障害児童・生徒用教科書点訳連絡会」(以下、教点連)の事務局長として、日本の状況と課題について報告させていただきました。また、新潟大学の渡辺哲也氏、大学入試センターの南谷和範氏が発表したほか、全視情協・サピエ事務局長の西村浩生氏と神戸市立盲学校教諭の馬場洋子氏も同行されました。簡単ではありますが、その様子をご報告します。

この大会は1993年から始まり、今回で15回目。欧米を中心に世界15ヶ国から視覚障害教育に関わる教員、コーディネイター、支援者、研究者等200人余りが集い、11のセッションや展示会を行い、情報交換と議論が繰り広げられました。

私は12月1日のセッションVで発表しました。演題は「日本における学齢期の子どもたちの点字習得の現状と課題 (Current Status and Issues of Braille Acquisition for School-age Visually Impaired Children and Students in Japan)」。参加者は約20人。英文の画像資料を西村さんに操作していただき、発表しました。

冒頭で、まず以下のような問題提起を行い、発表の趣旨を説明しました。

日本では医療の進歩や福祉機器類の発展、少子化等により、幼少期に視覚障害を負う児童生徒が大幅に減少している一方、平均寿命の伸びに伴って、中途視覚障害者の割合が急増している。そういった中で、点字を学び、使用文字として読み書きする人は確実に減少している。

その主な要因は、この20年ほどの間にITにおける音声メディアの日本語処理技術の開発が目覚ましく進歩したこと、また、パソコンやスマホが急速に普及していることが上げられる。確かに、新たな音声メディアやツールによって、視覚障害者の生活が豊かになったことは誰もが認めるころだろう。しかし、このまま点字使用者が減少していくことを放置しておいて良いのだろうか。とりわけ、学齢期における子どもたちにとって唯一の文字である点字を衰退させてしまって良いのだろうか。

この発表では、日本の視覚障害教育の現状に着目するとともに、学齢期の子どもたちの点字習得の現状を紹介し、点字の重要性と今後の課題についてふれてみたい。

続いて本論に入り、まず視覚障害教育において世界にも誇れる日本の盲学校教育の歴史と、後に取り組みされてきたインクルーシブ教育の現状を紹介。そして、インクルーシブ教育を受ける子どもたちへの点字の教材を整えるために、2005年に発足した「教点連」の活動を紹介しました。その中で、「日本の教科書には、児童生徒の学習意欲を引き出すために、ビジュアル化された表現が多く掲載されている。そのような内容を点訳することに点訳者はたいへん苦勞している。」ということを説明しました。実際にエーデルで描いたミニオンズやピカチュウ、アメリカの地図を会場で配ったと

ころ、たいへん熱心に触っておられたようです。

このほか、日本の盲学校教育における点字習得の現状については、筑波大学視覚特別支援学校における小学部から高等部普通科までの点字習得の事例や取り組みを取材し、紹介しました。

発表の最後に、今後の日本における点字習得の課題と改善策を3点にまとめました。

- ・日本ではこれまでボランティアの力を借りて視覚障害者の読書環境と学習環境が支えられてきた。しかし、このままの状況を維持していくことは難しくなってきたており、専門点訳者を配置し養成することが望まれる。

- ・残念ながら、点字使用の子どもが減少している状況に歯止めはかからない。各学校だけで解決しようとするのではなく、地域あるいは全国的な課題として取り組み、継続的に指導員や教員が参加する研修会を設け、地域の学校や盲学校で点字使用の児童生徒を受け入れられるようにモチベーションを維持していくことが求められる。

- ・子どもたちにも日々使用する点字を、より身近なものにしてもらうためにモチベーションを維持することが重要である。近年オンラインも広く普及していることから、そうしたツールを活かして、盲学校、インクルーシブ教育の別を超え、学校同士で交流し、同世代の子どもたちと情報や意見を共有することにより、点字への意欲や関心が維持されるのではないだろうか。

以上が発表の要旨です。与えられた1時間はあっという間に過ぎてしまい、参加者とディスカッションをする時間がなくなってしまったのが心残りですが、セッション終了後、点図や点字ディスプレイに関する質問をいただきました。今や、教育に用いられる資料の大部分を点図が占めているのは日本だけではないようです。また点字ディスプレイの開発も海外では活発に行われています。

他の発表では、幼児期に本人がどのように点字を導入していくか、またその家族への点字の理解、点字で読書をする際の手の動かし方の事例報告、重複障害児への言葉の学習方法、盲ろう児と点字の重要性、ピンディスプレイの活用事例等など、多岐に渡る話題が取り上げられました。展示会も開催され、点字端末、点字学習教材が出典されていました。その一つ、[Lego Braille]という点字でアルファベットの文字が浮き出ている、その下に墨字も併記されているブロック教材が印象に残りました。これは、文字学習や単語の習得に有効かと思います。また、点図と立体模型がセットになった学習教材もありました。これなら、ある物体を平面的にも立体的にも確認し、物体のイメージや認知学習に役立つ貴重な資料だと思いました。

このカンファレンスでは、言語や文化の違いこそあれ、点字学習の課題、触図における取組など日本と海外とで共通する点も多くあると感じました。そして、「点字はこんなに楽しい」、「点字も大切な一つの文字である」ということを、さらに伝えていきたいという思いを新たにしました。

参加させていただくにあたり、多くの方からアドバイス・コメントをいただきました。この場をお借りして、心から感謝申し上げます。

【理事会報告】

第4回理事会記録

日時：2023年11月11日（土）13：30～

場所：オンライン

参加者：池村、加藤、川本、込山、鈴、野々村、藤下、牟田口、山本、奥野

内容：

1. 奥野の米行きについて報告

11月28日に出発し、現地時間12月1日（金）9時45分から発表する新潟大学の渡辺哲也氏、大学入試センターの南谷和範氏も発表する。

サピエ事務局長の西村氏、神戸市立盲学校教諭の馬場氏が同行。

12月5日（火）に帰国予定。

2. 文科省との懇談について

次回の日程を文科省に申し出ることを確認した。

3. 9月のセミナーについて確認した

4. 12月のセミナーの役割分担、内容を確認した

5. 次回の教点連ニュースのスケジュールと執筆担当を確認した

6. 次回の理事会 1月27日（土）13：00～16：00

日本ライトハウス情報文化センターにて行うこととなった

次回の理事会で次年度計画と、総会のスケジュールを確認する

7. その他

① 新しい会員がはじめて教科書製作する際のフォローが必要

② 各点訳グループで、理数を中心とする主要科目の点訳者が減少している

③ 視覚障害と知的障害を併せ持つ生徒のための国語教科書（ほし本）の製作依頼があった。盲学校に在籍している生徒用の依頼だったが、どこも製作しておらず、相談の結果、担当盲学校で製作することになった。今後もこのようなケースが出てくるかもしれない。

第5回理事会記録

日時：2024年1月27日（土）13：00～16：30

場所：日本ライトハウス情報文化センター、オンライン

参加者：池村、加藤、野々村、藤下、山本、奥野（以上、会場参加）、
川元、込山、鈴、三上（以上、オンライン参加）

内容：

1. 令和6年度総会について

総会の持ち方と、今後のスケジュール、担当について確認した

2. 次回のセミナーについて

日程、内容について検討した

3. 令和6年度事業計画（案）について

内容を検討した。

4. 次号の教点連ニュースについて

内容、執筆担当、スケジュールを確認した

5. 12月の「音楽」のオンラインセミナーについて振り返りを行った

6. アメリカ出張報告

奥野より「Getting in Touch with Literacy 2023」での発表報告と、カンファレンスの様子が簡単に報告された。次回の「教点連ニュース」でも報告を掲載する。

7. 次回の理事会

次回は、3月30日（土） 9時30分より、オンラインで開催する。

発行日：令和6年2月29日

発行所：NPO 法人全国視覚障害児童・生徒用教科書点訳連絡会

ホームページ：<http://kyotenren.web.fc2.com/>

発行人：野々村 好三

ニュース発送元：（社福）名古屋ライトハウス法人本部

〒466-0855

名古屋市昭和区川名本町1丁目2番地

本会 E-mail：info@kyotenren.org

振込口座番号：00180-7-262151

口座名義：全国視覚障害児童・生徒用教科書点訳連絡会